

れの目の前でも起つて、常識のたのみがたさを痛嘆させる。人の見過ごす問題をとらあげる特異の視点をもつ南宮氏も、白氏の人柄を擁護して関氏を疑つたとき、白氏の「常識」に陥つて、それを超える女人の激情の存しうることが見えなくなったのではないか。

「故張僕射の諸妓に感ず」る詩は、関氏に対して無理解であるだけでなく、張建封の生涯に対してもはなはだ理解に欠く。この詩から浮かび上る「張僕射」は歌舞におぼれて一生を蕩尽した遊治郎である。だが建封はそうではなかつた。関氏は、おのれがそしられることよりも、忠誠の人である旧主を、おのれとの引き合いにおいておとしめられたことに憤つたのだ。白氏は当時、「諷諭の詩人」として正義をふりかざし、それが天子をはじめ多数に拍手かっさいされた、花形ジャーナリストであつた。人はスキヤンダルを好む。実状を確かめる手間をかけることはしたがるらない。いったん流れたスキヤンダルは、実状が明らかになつても、そこねた名譽を傷つく前の状態にはもどさない。関氏はおのれの存在が、旧主の名譽を傷つける口実となつたことに憤つたのである。

関氏の詩と行動とは外面から見ても内面から察しても一貫して、何ら不透明なものはない。白氏のもものは、そのいたるところに隠蔽の痕跡が感ぜられる。

白氏の「紅おしろいをどうして灰にさせないのか」の句が、さきにわたしの釈いたような同情の句だとしても、それが本心であり、女人への共感がかれの本色ならば、再び関氏の悲しみを女人に与えぬために、歌妓を養成することをやめよと人に訴えるべきである。だが、前記のように、白氏は後にみずから歌妓に教えて露裳羽衣の曲を舞わせ、おのれのみでなく友の元氏にさえそのことを勧めた。

関氏にかかわる白氏の詩が作られたのは、元和六（八一）年三月以前の数年間だった。そのころ李賀は、河  
南府試を受けて通り、長安での進士科の試をうけようとして、父の忌み名にからむ嫌がらせをうけ、受験を断念  
し、別途の方法で奉礼郎という官職につく、という時機にあたっている。嫌がらせをしたのは白氏の友の元氏だ  
とする説があり、今日では疑う人が多く、わたしもその一人だったが、再検討の余地がありそうだ。

賀の集中には元・白両氏の名は見えず、直接交渉をもった形跡もない。しかし、両氏に対する批判と感ぜられ  
る作が幾つかある。賀の「李夫人」が白氏の新樂府「李夫人」の批判であろうことは拙稿「夫人飛入瓊瑤台」  
『李賀論考』一〇九—一二〇頁に述べた。賀の「感諷五首」は、両氏の「諷諭」の諸詩に感じて制作したもの  
とも考えられそうである。賀の「沙路曲」は宰相の就任式に通る、特別に砂盛りした道を歌い、白氏の「官牛」  
はその砂盛りをそしめる詩である。これは白氏の方から賀を批判したことになる。白氏が意識したかどうかはとに  
かく。そうして賀の「蘇小小歌」は、白氏の「燕子樓三首」「故張僕射の諸妓に感ず」、元氏の「鶯鶯伝」と、  
それらに関連する「夢遊春詩」、白氏がこれに唱和した「和夢遊春詩一百韻」、ひいては当時の多くの男性の女  
性観に対する批判となっている。

「鶯鶯伝」が李賀の生前に成立していたか、また賀が読んでいたかどうかは分らない。しかし伝中の主人公の  
張生が、女主人公の鶯鶯を捨てた理由として語った次のことは、白氏の女性観と一致している。

「おおよそ天から美貌を与えられた女人は、その身に禍いをうけなければ必ず人を禍いにおとしいれる。彼女が富貴の人と結婚すればその愛情をうけて雲か雨になるか、でなければ水竜になるだろう。われわれにはその変化をはかりがたい。むかし殷の紂王、周の幽王は百万の国に拠りその勢力は盛大だった。しかるに一女子がこれを滅亡させ、その民をほろぼし、その身は殺され、今に至るまで天下の笑いものとなつてゐる。わたしの徳はとてもそういうわけものに勝つことはできない。だからがまんして彼女をあきらめたのさ」

このことばに、聞く者はみな深く感嘆した、と作者の元氏は記す。張生が作者の元氏に他ならぬことをすでに前人が考証し尽している。「伝」では、女が先に他の男と結婚したので男も他の女と結婚することになっているが、男が女の親に結婚の意志を表明しさえすれば二人の結婚がすぐ成立したろうことは、「伝」の前半の女の親の男に対する好意から察せられる。張生が鶯鶯と会ったとき、男は二十二、女は十七だった。元氏が従妹に会つて（情を通じた）のも元氏の二十二歳の年であり、その二年後に二十四歳で、京兆尹韋夏卿の季女をめぐつてゐる。元氏は明らかに官僚として出世するために頭官の女を選んで、寡婦の子の従妹を捨てたのだ。

「鶯鶯伝」がかりに李賀の死後に成立したとしても、元氏の結婚と従妹を捨てたいきさつは元和四、五年のころすでに人々の間に流伝し、賀もまた知つていたはずである。

李賀の師の韓愈は張建封の幕下にあり、白氏を迎えての宴にもたぶん同席し、関氏を見知っていた。

韓氏は元氏と交遊し、元和四年、元氏の妻が死んだとき、その墓誌銘を書いている。

白氏が「燕子楼三首」を作り「故張僕射の諸妓に感ず」を作り、それを聞いても韓氏はそのために抗議するよ

うなことはしないだろう。しかし弟子が座談に問えば「白氏は仲素の作にしてしまっているが、あれはきつと関氏の作さ」とその真相をつぶやいてはみせたり。唐代の昔でなくとも、今だっておおむねそういうものである。かかわりのない歌妓のために同僚との交誼を傷つけたりしないのが「紳士」のたしなみだから。

しかし、「紳士」のたしなみの成立し温存される社会では女人の純情も激情も見えないところに沈められる。まして、歌妓の正義などは「ごまめの歯ぎしり」にすぎない。文字によっておのれの歴史を記しえぬ民衆は、やむなく口碑にこれを記す。すなわち言い伝えてある。関氏の死を伝える一切が、仮りに小説だとしても、民衆の口碑から生れたもので、小説の奥に、実際に「紳士」たちにふみにじられた女たちがあまたいて、その呻吟が支えはげませばこそ小説が人の心をうつのである。近代の小説は知らぬ。唐代の小説に当時の文人が筆を染めたのはそのような理念をもてばこそであった。

元氏・白氏の諷諭詩は民衆の口碑にこもる呻吟を、紳士の世界に最も有力なマスコミュニケーションのメディアである詩の場面に引き出そうとする、真面目な意図から生れた文学運動で、推進者である両氏のその運動にかける誠意は信じてよいものであろう。

しかし、両氏が他の偽りや不義をあばくときほど、おのれの偽りや不義をあばくにも誠実で仮借なかつたかどうかは別の問題である。誠実を看板にする今日のある種のマスコミュニケーションが、おのれの偽りや不義に口をぬぐうように。

李賀は、たぶんそのような表裏を憎悪した。ことに父の忌名を引き合いに出してかれの進士科受験を阻むも

のに逢いおのれの前途を阻まれてからは。関氏の死は、賀が禍いに逢った時期に前後する。関氏のつらさうらめしさは、賀のそれを超えるものと、いまのわたしは察するが、そうはいっても、つらさうらめしさの客観的比較などできるものではない。賀が河南府試に通ったときの同府の長官は房式だったが、元和五年、元氏は房氏を弾劾した。どちらが正しかったのかは結論が出にくいのが、河南の人たちにとってはかなりよい長官であったことは新・旧『唐書』の記事で察せられる。忌み名の事件の仕掛人が伝えの通り元氏だとすると、李賀は、おのれの恩人とひっくるめてばっさり元氏にやられたことになり、旧主とからめて白氏にやつつけられた関氏のくやしさを、おのれのものとして同感しえたであろう。

八

関氏と白氏の「燕子楼」などの詩について長々と述べたが、その事件の考証をするために筆をとったのではない。旧稿「蘇小小」の誤りを訂し、言い足りなかつたことを補うのが、本稿の目的であった。

一九八一年からことし一九八三年五月末までに、わたしは亡妻原田千美の遺文集録『幻の葡萄』五巻を編んだ。第一巻「はじめに」の文を、長いが次に引く。

一九七五年、拙稿「蘇小小」を雑誌『李賀研究』にのせた。たちまち五年たち、補訂を加えなければと思つて

いるのだが、なかなか文章にならなう。

ことし一九八一年六月五日、赤谷（明海）氏が来訪し、一鉢の草花を恵まれた。「異国美人」というのが草の名だが、約四十年前に、学友の竹内不成氏が田中千美に与えたニックネームである。いきさつは赤谷氏の『平安学園と私』（一九七七年著者発行）にくわしい。少し引用する。……は省略を示す。

この夏へ一九四六年：引用者注、僕の復員帰郷を聞いて真先に便りを寄越したのは森田曠平である。彼は印象派を好む画家である。そしてその文に曰く、「原田君が結婚しました。その相手が誰であるかを聞かれたらさぞ君は嘆かれるでせう」と。次に写実家の宮崎篤三郎から云つて来た。「原田君が田中さんと結婚しましたよ」と。戦争と病氣とに打ひしがれて帰つて来た僕の心には、今更それを嘆く程の余裕もないが、歓迎したい程のニュースでもなかった。以前原田憲雄に対して真向から結婚に反対した僕だった。その相手田中千美さんは、その名の示す如き千人に一人と云つた美人では決してなかったが、よく問題になる程の女性だった。原田が初めてこの女性に会つたのは水廻京都支社の恭仁（くに）京吟行の時である。……田中女史に、その後僕も紹介されるの光栄に浴し、更に僕の友人にして愛すべき毒舌家たる竹内不成君も拝顔すると云ふ段に至り、彼は感激の余り、謹んで“異国美人”なる尊称を捧げたのである。これはいかもの食ひの原田の気に入つたことは勿論、当の御本人も“異国”はぬきにしてひとり悦に入つてゐたらしい。其の後この不成君からほんものの“異国美人”が竹垣にからんで咲いてゐる彩色画が届けられ「異国美人は遠い遠い旅に出ますのよ」と書き添へてあつた。……かくして僕は目のあたり異国美人に向ひながら、波瀾の多

かつた我々の交りを想ひ続けた。原田、歌、田中さん、一艸舎、大塚先生、岡本さん、杉田、森田、宮崎：  
：岡本さんは死んだ。僕が田中さんと絶交の様になったのも遠い昔である。原田も戦争に行き、僕も戦争に行つた。原田も帰り僕も生きて還つて来た。一艸舎はつぶれ、異国美人は原田夫人として又親しく自分の近辺におさまっている。そしてお互に三十を越して……

異国美人を見ていて、「蘇小小」の補訂の文ができないゆえんに思いあつた。

李賀の「蘇小小歌」は、女性の尽きぬ悲しみを、女性の立場にたつて歌おうとしたもの、とわたしは感じ、分析して述べたのが拙稿だった。

「補訂」は、結論からいえば簡単である。さきに「秋」の「夜」の詩とみた「蘇小小歌」が、じつは「秋」とか「夜」とかいった人間の時間を超えていて、あの詩の成立する時間は、強いて名づけるなら「鬼時」とでもよぶべきものであろう、というのである。唐突すぎて、おそらく人さまの同感を得にくかるう。文章に書くとするれば、納得される論理を展開せねばならぬ。けれども問題は、論理以前のわたしの生きかたに關つてゐる。

千美の死んだ年、「桃栗集」へ遺歌集を刊行したが、その女性としての悲しみは、とうてい一冊に盛りきれぬ。さきに記したように遺稿がなおあつて、千美の悲しみが綿々とつづられている。次々に上板するつもりだったが、怠つて今日まで果してゐない。

「補訂」の書けないのは、「女性の尽きぬ悲しみ」などといひながら亡妻の悲しみにさえこたえてゐないわたしの怠惰を蘇小小が憫笑しているからではないか。

「女性の悲しみ」は、浅薄なわたしにくみ尽せるものではない。そのことはつくづく自覚している。遺稿は努力すれば出せないわけではない。「蘇小小」の補訂はしなくとも、わたしの考えつく程度のことには、いつかは他の人によっても解き明されるだろう。千美の遺稿は、その成立にたちあつたわたしでなくては編集できない。したがらといって千美の悲しみが癒えようはずはなく、この作業が他の女性の悲しみを誘発しないという保証もない。一個の平凡な人間にすぎないわたしが、たまたま男性であることによって女性の悲しみの原因となり、償おうとする行為がさらに女性の悲しみの原因となるかもしれぬことを思うと、途方にくれる。だが、このような感想も、おのれの怠惰を飾る言いわけにしかなるまい。

「遺稿」とはいうが、例えば、すべての言葉が、発せられた時そのままに、ありありとわたしを撃つ。わたしは人間の時間の流れにただよいながら老いたが、千美の言葉は、生きた時間をそのままに凝結しているのだ。蘇小小の時間もまた、凝結した時間なのかもしれぬ。

蘇小小が来ぬ人を待つて佇ちつくした西陵下が何処であるかの論議が、古来いくたびか重ねられたが、それは、たぶん地理的空間ではなく、鬼時と垂直に交叉する「鬼処」なのだ。

千美とともに歩いた壘の原も、松ヶ崎も、花園も、流転してもはや無いが、千美の文章に対うとき、まさまざと甦る。これもまた、西陵下のような鬼処であろうか。

「鬼時」といふ、「鬼処」というのは、生き残って影のようにさまよう存在の方からすることばであって、「生は一瞬、死は永遠」という立場からすれば、鬼時と鬼処こそ、生々として手ごたえのある実存的時間、現実的空

間、であるのかもしれない。

あやふやに生きあやふやに老いたわたしが、思いついて千美の遺文を編もうとしても、果してわたしの見る幻のように鮮烈によみがえらせうるかどうかは、はなはだ疑問だが、とにかく、やってみるほかない。

赤谷氏はじめ、千美の旧友諸氏の温い援助によって、『幻の葡萄』の編集を終えた。その過程で、たえず感じたことは、千美という女性の、友であり、恋人であり、夫であったわたしが、ほとんど身勝手を男であった、ということだ。千美が死んだとき、わたしは再婚すまい、と思ったが、七年後に再婚した。誰に強いられたのでもなく。そして、今の妻に対しても、身勝手を夫でありつづけていることであろう。

前節までに、わたしは白氏や元氏をとがめるに似た言説を弄した。しかし、わたしにはかれらを指弾する資格はない。白氏や元氏を批判するかに見える李賀の諸詩にも、他への批判というより、おのれの女性への身勝手さに対する批判がこめられていたような気がする。

論理が混乱して、お読みくださる方々にはわずらわしく感ぜられるであろう。また李賀の詩を説きながら亡妻とおのれの過去の痴話をさらけ出す無慚に眉をひそめられるかもしれない。読者がここから立ち去られるとしてもわたしにはそれを止める理由も力もない。

ただ、わたしが李賀を読むということは、おのれの「私」に立ちかえり、「公」面をしてきいた風なことを言おうとするおのれを突きくずすことに他ならぬ。「蘇小小歌」を読むということはおのれに向けられるであ

ろう女性の批判に耳を傾ける姿勢を学ぶことである。そのようなわたしにとっては最も身近かな女性との関わりを省察熟視せずには考えを進めることはできないのだ。『幻の葡萄』は編み終つても、「蘇小小歌」の「鬼時」についてのわたしの考えは一向に深まらず、人さまに向かつて説くべき論理も見あたらぬ。あの「結論」を結論としてこの稿を放り出したくはあるが、それではまた放り出したことを悔いねばなるまい。どの道を通つて出たところがいかなる処になるかは、全く不明だが、たどりついた今の場所から、とにかく歩き出すことにする。

## 九

かつて、李賀の詩を「時間」の方から考える材料として統計表を作ったことがある。次の頁のものがそれである。『漢詩大系・李賀』を素材にした。賀の詩二四四首のうち、春：八四、夏：一一、秋：七一、冬：一六、その他：六二。春と秋の（ ）内の一三と一二は、他の季節を混在する度数である。

さらにそれぞれの詩中、朝、昼、昼から暮にかけて、暮、夜、夜から暁にかけて、その他の時間を歌う語・句を含む度数をあげた。一詩中に異つた時間が混在するので、その度数の合計は詩の数の合計よりも多い。

ただ、時間の分け方は常識的で、大ざっぱで、従つてここに現れた数も大ざっぱなものである。少し突っこむと、分け方の基準とした常識が、李賀の詩の分析にはそれほど役にはたたぬことがわかつてくる。どうやらそこが、時間論として李賀の詩にはいつてゆく入り口らしい。

	春	夏	秋	冬	その他	計
		84 (13)	11	71 (12)	16	62
朝	14	3	12	4	5	38
昼	29	4	7		6	46
昼→暮	2		1			3
暮	8	1	3	2	3	17
夜	19	3	37	6	6	71
夜→暁	1		5		1	7
その他	17	2	6	4	42	71
計	90	13	71	16	63	253

「地」の時間Aは、「地」の時間Cに接続するが、その間に「音楽」の時間Bが挿入されたことである変化を生じる。「音楽」の時間Bは、「音楽」の時間Dに接続するが、その間に「地」の時間Cが侵入したために、BとDとは変化している。その変化は「昼」と「昼から夜へ」という形に分けることができようが、この二つも、

「李鴻筵索引」(1001)は、上の表では、秋の詩で、昼と夜の含まれたものとして分類した。けれども、この詩では、一・二・三・四句に流れる時間と五・六句に流れる時間とは異種の時間なのだ。いま仮りに前者をAとし、後者をBとする。次に、七・八句に流れる時間をCとし、九―一四に流れる時間をDとすると、CとDもまた、異種の時間なのだ。そうして、AとCとはいわばこの詩の「地」の時間、BとDとは「地」に挿入された「音楽」の時間なのだ。

「地」の時間の昼と「音楽」の時間の昼とは異種である。

この一首は、こまかく見てゆくと、以上のような異種の時間を組み合わせた複雑な構成をとっていて、そのところが四種の韻で押韻するという韻法で暗示してある。組み立ては複雑だが、「地」の時間も昼から夜に向かい、「音楽」の時間も昼から夜に向かっているため、全体が昼から夜への一つの推移と感ぜられ、「地」の時間と、「音楽」の時間とが別々のものではなく一つの時間として、しかし単純な一つの時間と受けとめるには異常にふくらんだ時間として、読者に印象づけられるのだ。

白氏の「琵琶行」は、音楽の演奏を詠じた大作で、賀の作よりはるかに有名だ。韻法からいっても中々凝ったもので、楽音描写も巧みだが、白氏をポール・モーリアとすると、賀はバルトークにあててもいい位に違っている。詩の中の時間の構成と韻法の対置という点になると、白氏はほとんど顧慮するところがないようにみえる。賀が同じく音楽をうたった作に「聴類師琴歌」(524)という十六句の詩がある。四句ずつの四部分から成り、第一は秋、第二は春で、いずれも「音楽」の時間。第三には時間の表現はないが、第四と共に「地」の時間のうちにあり、第四が秋だからこれも秋ということになる。同じ秋だが、第三と第四が韻が違うのは、第三が楽師をうたい、第四が聴者たるおのれをうたっているからであろう。この主客の相違は、心理的なものとも空間的なものとも見得る。いずれにしてもその相違が押韻に対応させてある。

「残糸曲」(1002)は本誌第十四号でくわしく分析したが、その時間についていえば、この八句の詩の、一・二・五・六・七・八は「地」の時間で春であり、そこに奇異な三・四句が突き刺さっている。この三・四句は、時

間の消滅した男女の愛、エアポケットのような時間とでもいうべきもの。

「雁門太守行」は八〇七年、賀十七歳以前の作と推測しうる詩で、その意味的展開と押韻からみて、三つの部分にわけられ、第一は一・二句、第二は三・四・五・六句、第三は七・八句である。全体は秋季でつらぬかれており、第一は昼あるいは日暮。第二は夜、第三は時間は夜だが、前の行までの「地」の時間に垂直に交叉した太守の意志だ。第二句の「甲光向日」を宋本系諸本が「甲光向月」とするため、初・二句も夜を詠じたものと見る人が多い。だが、それでは李賀がなぜ次の句から換韻しているのか説明がつかない。ここはどうしても「甲光向日」でなければならず、そうだからこそこの詩が迫力に充ちたものとなり、伝えのように、疲労していた韓愈をさえ驚嘆させたのだ。

「河南府試十二月樂辭」は八〇九年、十九歳の作と考えられる。題の示すように一年十二月、それに閏月をうたり十三首。従って各首ははじめからその時間が規定されている。だが、その各首における時間の扱いは単純ではなし。

「正月」の八句は一・二・三・四句は現実の時間。そこへ夢想の時間を詠ずる五・六句が投入され、七・八句は現実にかえる。その転換と換韻とが一致する。「二月」の九句は前の七句が「地」の時間をきらびやかに春の風物でいろどりながら進み、第八句で「音楽」の時間が投入され、第九句は「地」の時間にかえるが、投入された異種の時間によって、「地」の時間も全く変質して冬のように死の色を帯びてしまった。時間の変化は押韻と対応する。これらのことは拙稿「十二月樂辭」(『李賀論考』三一四頁)にくわしく述べたのでこれ以上はく

りかえすまい。他の作についても、例を拾えば枚挙に暇がない。読者の検討にゆだねたい。

一〇

詩におけるこのような時間の扱い方を、李賀はいつ、どこで、だから、学んだのだろうか。

李賀の師は韓愈である。韓氏は、一般には散文の改革者として有名だが詩の改革者としても大力量を発揮した人で、そのおおよそについては拙著『韓愈』で述べた。押韻についてもさまざまの方法を駆使しているが、かれの関心は同じ韻でどれだけ長大な詩を作りあげるかとか、意味的展開を無視した換韻をどれだけ効果的に続けるかといった一種のアクロバットの韻法に傾斜し、そこで見事に成功しているのが、かれの大詩人たる所以であろう。しかし時間についての考えは李賀ほどは深くない。前節で説いたように、賀の詩は、韓氏に会うまえから異種の時間が韻法に浸透している。

李白の「宣州の謝朓の楼に校書叔雲に餞別す」や、王維の「祖三詠に贈る」などは異種の時間を押韻で区別している。これらは李賀の時間の扱い方に近似するまれな例だが、よく見ると、ほとんど偶然の近似で、李白も王維も他の詩でこの方法を追求しているようには見えない。

換韻を許すのは「古詩」と名づけられる文体の詩のみで、「古詩」の中でも「樂府体」は韻のみでなく一句の文字数も極めて自由である。李賀の詩のほとんどすべてが「古詩」であり、「樂府体」が多いのは、かれの詩法、

ことに時間についての考察が韻法と結びついたところにあつたからに違いない。換韻を許さぬ「今体詩」すなわち律詩や絶句を、かれがあまり手がけなかつたのは、かれの内部感覚としての時間論が、はじめから一つの枠を決定してしまふ今体の韻法を、不自然として嫌つたからであらう。（といっても、かれが今体の詩法に習熟しなかつた、というのではない。今体詩の表面的な均斉よりも、古体詩の時間把握に深切でありうる可能性に期待した、のであらう）

李賀にさきだつ古詩・樂府の作品を見渡して、さきの李白・王維の詩のように賀の詩法に近似するものがあつても、立ち入つて考察すれば、別個のものであつた。もとより、そのような先例からも、賀が学んで養ひとしたには違いなかるうが、単にかれの資質が見出したというにはあまりにも従来の中国人の詩法、その詩法を成立させた感性・理性とは違つたイデーのようなものが、かれの詩の背後に存在すると察せられる。

李賀の詩法の来源をさぐつてこままでくれば、かれがその詩中に明記する「櫻伽」経や他の仏教諸典にそのイデーのようなものを求めてもおかしくはあるまい。

「櫻伽経」については旧稿「櫻伽」（『李賀論考』三六八頁）、「世尊と夜叉王」（『李賀研究』第九号）にくわしく書いた。読んでいただけば、ここに重ねて説くことはいらぬと思うが、殊に関わりの深い後者がほとんど十年以前のもので、発行部数も少く、お求め下さつても既に在庫もないので、必要と思われる事項をかいつまんでおく。

海中の竜宮での七日間の説法を終えた如来が、南島のマラヤ山のランカー城にゆき、城主とその一族に説法する。如来は「バガヴァット」（世間主・勝者）と「世尊」の二面をもち、城主は「大勢菩薩」と「ラーヴァナ夜叉王」の二面をもつ。上陸した如来を迎える王はトータカ調、ガーター詠唱調などの声で如来の功徳を歌頌する。如来は王の請いを受けて説く。「過去仏は、このすぐれた宝山中で、夜叉をあわれむがゆえに、内身に証明した法を説かれた。未来仏もまたそのように、この宝山中で、もろもろの夜叉たちのために、またこの深法を説かれよう。夜叉はこの宝山中で、如実に修行する人、現われ現わす法行の人、それなればここに住むことができよう。夜叉よ、今あなたに告げる、わたしと諸仏の子らは、あなたたちをあわれむがゆえに、あなたの布施と懇請を受けて説こう」。その後、如来は神力によつて幻のランカー城を化現する。スメール山に向き合い、その城中にはやはり如来がおられ、仏の子たちがあり、夜叉王とその一族がいる。そうしてその王が如来に問い、如来はこれに答えて法を説く。如来の説法が終ると、如来も仏の子らも消え、夜叉王はおのれがもとの宮殿にいてほかのものが見えないのに気づく。王はつぶやく「さきに見たものは誰が作ったのか。法を説いたのは誰だろう。聴聞したのは誰だったろう。わたしの見たのは何の法で、それでこれらのことがあったのか。あのもろもろの仏国土と、もろもろの如来の身、このよりのもろもろの妙なることは、今みなどこへいったのか。夢で思ったことだろうか、幻が作ったものだろうか。ほんとの城市だったのだろうか、ガンダルヴァの城だったのだろうか。：：見るものと見られるもの、一切把握できぬ。説くものと説かれるもの、こんなものもまたない。仏法の真実のありかたは、有でもなくまた無でもない。存在の相はつねにこうしたものだ、ただ自らの心が分別するのだ。

……智者はこのように、一切のもろもろの境界を観じ、身を転じて妙なる身を得る。これが仏の菩提なのだ」

現在の如來の内身に証明せられた法が説かれるとき、過去と未来という異時間の仏の法も現在に招きよせられ、現在の空間に、過去の空間も未来の空間も化現し、異時間の空間における人間の行為も仏の思惟も、現在という同時間の同空間に幻成し、如來の説法が終了すると異時間の異空間は消滅する。しかし「現在の空間」に残存した王にとって、「現在の空間」におけるおのれが真実なのか、消滅した「異時間の異空間」が真実なのかは、わからぬ。『莊子』の中に出てくる「胡蝶」の話に似てはいるが、その構成ははるかに複雑に時間と空間が錯綜している。過去仏説法時のランカー城と、未来仏説法時のランカー城が、現在仏説法のランカー城と同じ姿でそこにある、というのは永劫回帰の哲学をまるめておいてせんべいにしたような感じもするが、この経では、トータカ調、ギター詠唱調などさまざまの声調や、種々の楽器の演奏によつて、異時間は異時間として、異空間は異空間として、表現されている。「バガヴァット」と「世尊」、「ラーヴァナ夜叉王」と「大慈ボサツ」が、同一の「如來」と「ランカー城主」の二面の訳し別けであること、その訳し別けによつて十巻本が、四巻本や七巻本では見失なわれる本經の的々たる真意を現しえたことは旧稿で述べた。

李賀の詩の、時間のとらえかたと韻法とは、かれが楞伽經を十巻本で読んでいたと考えれば、すんなり納得がいく。かれが十巻本を讀んでいたろうことを、旧稿でも述べたが、その後に見付けた根拠を本号の「李孝逸」で説くつもりだ。

楞伽以外の經典では、唐代に盛行した『妙法蓮華經』の「見宝塔品第十一」に、現在仏釈尊の説法の座に過去  
仏多宝如来の宝塔が大地中から出現して釈尊の法の眞実を証明し、「從地湧出品第十五」では未來に法華經を宣  
布すべきボサツ群が地中から湧き出る場面があつて、常識的な時間觀が転倒する。後者には「髮白面皺」の語が  
あり、李賀の「嘲少年」中の語と同字面であることは本誌第十四号の「雜記」に書いた。  
賀の詩中の時間觀念に仏典の時間論が深く影さしていることは、もはや疑えまい。

一一

長い回り道ののち「蘇小小歌」に帰るときが来たようである。前稿「蘇小小」の結論を次に引いておく。

娼婦となつたとき、蘇小小は恋愛し結婚する資格を失つた。娼婦として接する男の中に愛すべき人を見出  
した。彼女は禁忌を犯してその人を恋愛しその人と結婚しようとした。禁忌を犯すことによつて彼女は娼婦  
としての資格を喪失する。娼婦としての資格を喪失した蘇小小を一人の女性として復活させるために、男も、  
社会も、手をさしのべなかつた。蘇小小の生きる場所は地上にはなく、彼女の肉体は死せざるを得ぬ。  
肉体の死によつて魂魄もまた死ぬものならば、彼女は人を待つ必要はない。

蘇小小は、その肉体の生きてあるとき、家族と社会によつて一人の女性としての「死」を与えられた。そ

の「死」に反抗することによって、愛する男と社会から肉体の死を与えられた。その肉体の死んだのちにも、彼女の魂魄は「死」と死に反抗し、「死」と死を拒否して、おのれを死に追いやった男を待ち、女性を「死」と死に追いやって恬として恥じぬ社会に無言の糾弾を投げつけている。

李賀の作は、そのような蘇小小を歌っている。

「死」と死を拒否し続ける蘇小小の所在を「墓」とはいえぬ。彼女の拒否を認めようとせぬ社会が「墓」と呼ぼうとも、彼女の拒否を歌う李賀が彼女のいまも現に生きてあるところを墓と呼ぶはずがない。李賀の作の題名は「蘇小小墓」ではなく「蘇小小歌」であった。

この結論に誤りはない、と信じる。わたしの誤りは、この結論にみちびかれながら「蘇小小歌」の成立する時間を取りちがえていた点にある。

蘇小小が、「死」と死を与えられたとき、人間の時間は奪われた。すなわちそこには、春・夏・秋・冬はない。朝も昼も暮も夜も暁もない。「死」と死を拒否する彼女は、奪われた人間の時間をとりもどそうとする。しかし彼女が復活せぬかぎり、蘇小小の時間は人間の時間とはならぬ。蘇小小の時間にも、春のような、秋のような、昼のような、夜のような、いろどりはある。だがそれは人間の時間の四時・四季とは異質のものだ。わたしは、そのような蘇小小の時間に、かりに「鬼時」という名をつけた。

蘇小小を「鬼時」に追いやったのは、彼女に「死」と死を与えた、非人間的なエゴイズムであった。

非人間的なエゴイズムがぬけぬけと生きのびている時間を「時間」として許す世界では、蘇小小の時間は、「鬼時」と呼ばれるほかはないが、人間的な時間が真の「時間」とするならば、蘇小小の「鬼時」こそが、真の「時間」であり、われわれの住む時間はむしろ真の鬼時ではないのか。

ここ数年、わたしは手あたり次第、時間論に関する本を読んできた。貧弱な理解力では要約できないが、哲学者の間でも、科学者の間でも、この問題になお定論はなく、定義しうるなにかのものではなく、極めて人間的な、経験に対する意味づけのようなものらしい、ということがおぼろげながら分つただけであった。

わたしが李賀から学んだ時間についての考えと、さほど差がありそうにもない。もとよりおのれの愚かな理解ですぐれた労作を概括しようとするのではない。わたしにとっては、「蘇小小歌」の時間を考える上で、わたしのたどりついた結論をくつがえす有力な時間論があれば、根本から考えなおしたい、と思つて弱腰に鞭をうったのに、今までのところ、そういうものには出くわさなかつた、というだけのことである。

「蘇小小歌」の時間が「鬼時」ならば、その詩中の「西陵下」も人間の世界の西陵下ではない。西陵下は、蘇小小に「死」と死を与えた人間が、蘇小小の死んだ肉体を埋めた場所に過ぎぬ。死肉の埋められた場所には、木ぎれ一本のしるしも立てられなかつたはずである。十年もたてば、もはやどことも知れず、人は蘇小小の名さえ忘れてしまっていたらう。忘れてしまった歌妓の墓が出来たのは、たぶん詩の好きな風流人の感傷と、そこに目をつけたこすっからい商売人の「観光開発」のお蔭で、感傷と商売さえ満足すれば、西陵が東陵になつたとこゝろで別にどうということはないのである。